

## 2022 年度下期のファンド動向

Short Review  
2023 年 6 月資産運用研究所  
後藤 孝輔

## 1. はじめに

コロナ禍からの経済正常化に向けた過程で起きたロシアのウクライナ侵攻が契機となりエネルギー価格の上昇や食糧価格の高騰など、世界的にインフレ率が上がった。このような中、米欧を中心に各国中央銀行はインフレ率を抑えるため金融引き締めを強めており、連邦準備制度理事会（以下、FRB）は米連邦公開市場委員会（以下、FOMC）において、2022 年 6 月～2023 年 3 月まで 9 会合連続で利上げを実施し、2023 年 3 月末時点の FF 金利<sup>1</sup>の誘導目標は、2007 年 9 月以来となる上限 5%とした。

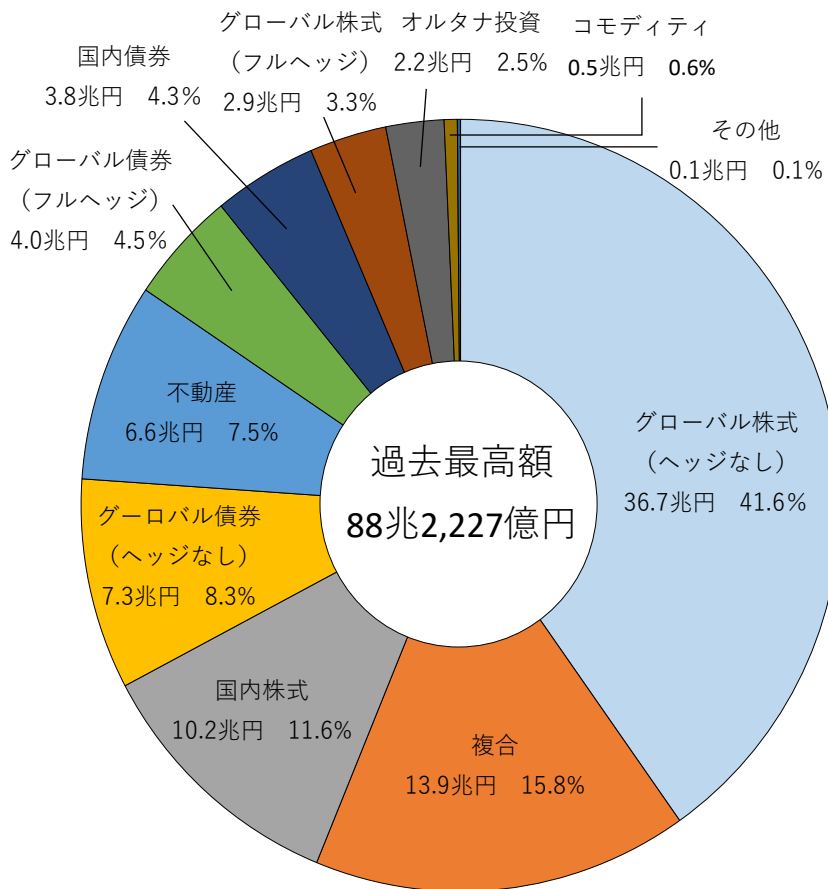
国内の ETF を除く公募追加型株式投信（以下、ファンド）の 2023 年 3 月末の純資産総額は、2022 年 9 月末の 82 兆 5,037 億円から 5 兆 7,190 億円増加し、過去最高額の 88 兆 2,227 億円となった。ファンド動向を日興大分類（以下、分類）別<sup>2</sup>でみると、「グローバル株式（ヘッジなし）」、「複合」、「不動産」、「コモディティ」の 4 分類に連月資金が流入し、全体では下期通算で 3 兆 7,638 億円の資金が流入した（図表 1、2）。

ファンド別でみると、「eMAXIS Slim 米国株式（S&P500）」が、2022 年度下期通して 4,005 億円の資金が流入し資金流入額首位となり全体を牽引した。また、同ファンドは純資産総額で「アライアンス・バーンスタイン・米国成長株投信 D コース毎月決算型（為替ヘッジなし）予想分配金提示型」を 2023 年 2 月に超え、3 月末時点で 1 兆 8,757 億円となった。

<sup>1</sup> フェデラル・ファンドレート。日本のコール市場の「無担保コール翌日物」金利に相当する米国の代表的な短期金利。

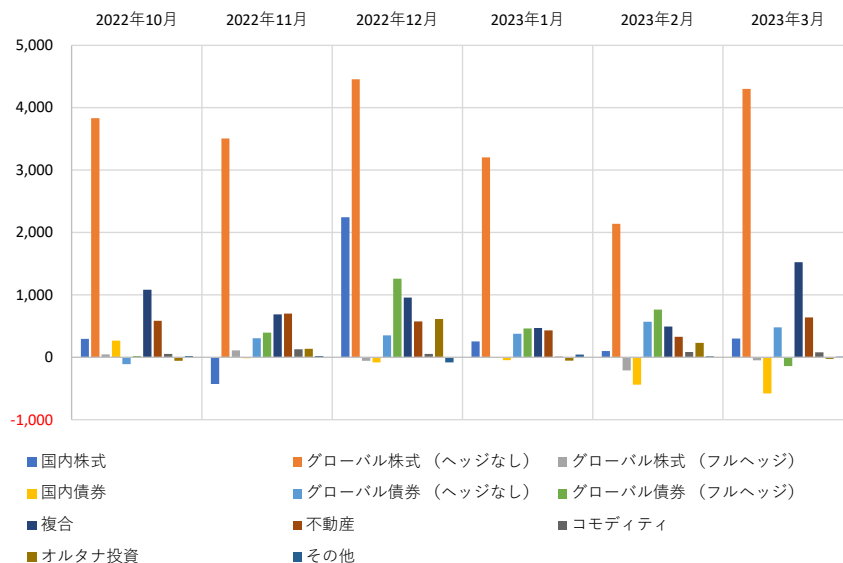
<sup>2</sup> 日興リサーチセンターが独自に定めたファンド分類のこと。すべての国内籍追加型株式投資信託を対象とし、目論見書の記載事項をベースに、投資対象、投資地域、運用方針、投資手法に着目して分類を行っている。

図表1 2022年度下期（2023年3月末時点）の分類別の純資産総額



(出所) 投資信託協会より日興リサーチセンター作成

図表2 2022年度下期（2022年10月～2023年3月）の分類別の純流出入額（億円）



(出所) 投資信託協会より日興リサーチセンター作成

次に、2022年度下期の分類別のファンド騰落率に着目すると、下期は上期と打って変わって、「国内債券」、「不動産」以外で好調なパフォーマンスとなった（図表3）。最も好調であったのは「グローバル株式（フルヘッジ）」（+9.90%）、次いで「国内株式」（+8.67%）であった。

ファンド別でみると、2022年10-12月期は世界の資源関連企業に投資するファンドが占めていたが、2023年1-3月期に関しては、これまでインフレ率の上昇に伴う金融引き締めにより軟調であったハイテク関連株式ファンドが騰落率上位に挙がってきた（図表4）。中でも、「野村世界業種別投資シリーズ（世界半導体株投資）」は年初からの3カ月間で+31.4%のパフォーマンスであり、2位以下もARK社が運用するファンドを中心にハイテク関連ファンドが名を連ねた。

図表3 2022年度下期（10月～3月）の騰落率<sup>3</sup>（月末基準）

日興分類	2022年10月	2022年11月	2022年12月	2023年1月	2023年2月	2023年3月	下期	上期
国内株式	4.92%	2.49%	-5.40%	4.29%	0.95%	1.48%	8.67%	-3.52%
グローバル株式（ヘッジなし）	6.07%	-0.96%	-5.18%	4.86%	1.54%	-1.16%	4.56%	-7.86%
グローバル株式（フルヘッジ）	5.28%	2.88%	-2.37%	5.20%	-1.30%	0.34%	9.90%	-21.05%
国内債券	-0.10%	-0.49%	-1.27%	-0.24%	0.89%	1.17%	-0.05%	-1.79%
グローバル債券（ヘッジなし）	2.93%	-1.64%	-3.47%	2.11%	1.27%	-0.52%	0.50%	0.66%
グローバル債券（フルヘッジ）	0.16%	2.07%	-0.55%	2.07%	-1.78%	0.17%	2.12%	-10.04%
複合	2.98%	0.20%	-3.39%	2.53%	0.39%	0.16%	2.76%	-6.11%
不動産	4.39%	-0.29%	-4.29%	3.68%	0.12%	-5.03%	-1.93%	-11.58%
コモディティ	1.57%	-0.26%	-1.04%	1.76%	-2.23%	3.09%	2.71%	-3.13%
オルタナ投資	2.27%	0.20%	-2.03%	2.81%	-0.42%	-0.67%	1.89%	-6.98%
その他	1.39%	0.45%	-1.42%	1.05%	0.11%	0.58%	2.19%	-1.47%

（出所）投資信託協会より日興リサーチセンター作成

図表4 2022年10-12月と2023年1-3月のファンド騰落率上位の比較

ファンド名称	純資産総額 （億円）	騰落率 （%）	ファンド名称	純資産総額 （億円）	騰落率 （%）
		10-12月			1-3月
トルコ株式オープン	58	53.0	野村世界業種別投資シリーズ（世界半導体株投資）	462	31.4
ブラックロック・ゴールド・メタル・オープン Aコース（為替ヘッジ付）	105	20.1	デジタル・トランスフォーメーション株式ファンド	2,087	29.7
ダイワ金融新時代ファンド	53	16.7	グローバル・メタバース株式ファンド	52	25.8
資源株ファンド 通貨選択シリーズ <ブラジルリアル・コース>（毎月分配型）	101	14.1	グローバル・フィンテック株式ファンド	1,026	25.5
資源ファンド（株式と通貨）ブラジルリアル・コース	90	14.1	グローバル・フィンテック株式ファンド（年2回決算型）	788	25.5

※対象は純資産総額50億円以上、日興分類でパッシブ型、ブルベア型、ETFを除くファンド。

（出所）投資信託協会より日興リサーチセンター作成

<sup>3</sup> 値は該当ファンドの騰落率の単純平均で算出。

## 2. 10月

10月の株式市場をみると、米国ではNYダウが前月から約14%の上昇、ドイツもDAX指数が約9%の上昇となるなど、先進国を中心に大きく上昇した。また、グローバルリート市場も比較的堅調に推移した。背景には、2022年央にかけて大きく上昇した米国の消費者物価指数（以下、CPI）の上昇率が2022年6月をピークにやや低下傾向を見せ始めており、FRBの利上げスピードも緩やかになるのではないかと期待感などがあつたと考えられる。なお、為替市場に目を向けると、10月は一時1ドル151円台を付けるなど、円安傾向が続いている。

このような中、当月のファンド動向は、純資産総額が前月から4.4兆円増加し、86兆8,961億円となった（図表5）。純流出入額は、6,038億円の純流入であった。分類別の騰落率は、「国内債券」以外すべてプラスのリターンとなり、最も騰落率が大きかったのは「グローバル株式（ヘッジなし）」（+6.07%）であった。資金流入額上位の個別ファンドでは、三菱UFJ国際投信が運用するノーロード・インデックスファンドであるeMAXISシリーズが人気を集めており昨年から連月上位にランクインしている（図表6）。騰落率上位の個別ファンドでは、主に資源株ファンドが好調である他、バリュー株式ファンドの上昇も目立った。

図表5 2022年10月のデータ（億円）

	純資産総額	前月からの増減	純流出入額	1か月の騰落率
国内株式	96,278	4,857	296	4.92%
グローバル株式（ヘッジなし）	358,772	27,103	3,830	6.07%
グローバル株式（フルヘッジ）	28,359	1,275	45	5.28%
国内債券	39,022	195	268	-0.10%
グローバル債券（ヘッジなし）	74,714	1,823	-111	2.93%
グローバル債券（フルヘッジ）	36,581	54	23	0.16%
複合	136,640	4,710	1,083	2.98%
不動産	71,882	3,191	585	4.39%
コモディティ	4,708	115	52	1.57%
オルタナ投資	20,943	554	-57	2.27%
その他	1,062	46	23	1.39%
合計	868,961	43,924	6,038	-

（出所）投資信託協会より日興リサーチセンター作成

図表6 2022年10月における資金流入額と騰落率の上位ファンド<sup>4</sup>

No.	ファンド名称	1ヵ月流入額 (億円)	No.	ファンド名称	1ヵ月騰落率
1	eMAXIS Slim 米国株式（S&P500）	769	1	資源ファンド（株式と通貨）ブラジルリアル・コース	16.6%
2	ダイナミックアロケーションファンド（ラップ向け）	406	2	資源株ファンド 通貨選択シリーズ <ブラジルリアル・コース>（毎月分配型）	16.6%
3	eMAXIS Slim 全世界株式（オール・カントリー）	368	3	MLP関連証券ファンド（為替ヘッジなし）	16.5%
4	楽天・全米株式インデックス・ファンド	326	4	フィデリティ世界バリュー株式ファンド Bコース（年2回決算・為替ヘッジなし）	14.9%
5	ファンド・マネジャー（国内債券）	326	5	フィデリティ世界バリュー株式ファンド Dコース（毎月決算・予想分配金提示型・為替ヘッジなし）	14.9%

（出所）投資信託協会より日興リサーチセンター作成

<sup>4</sup> 資金流入額（左表）はETFを除くファンド、騰落率（右表）は純資産総額50億円以上、日興分類でパッシブ型、ブルベア型、ETFを除くファンド（図表8、10、12、14、16も同じ）。

### 3. 11月

11月初めに行われたFOMCでは4会合続けて0.75%の利上げとなった。しかし、11月中旬に発表された米国CPIの上昇率のさらなる低下傾向が確認されたこともあり、今後のFRBの利上げスピードの鈍化などへの期待感から株式市場は全般的に好調であった。11月の各国の株式市場をみると、米国ではNYダウが前月から約6%の上昇、ドイツはDAX指数が前月同様に約9%の上昇となった。また、グローバルリート市場も前月に続き比較的堅調に推移した。一方、債券市場は米国の10年国債利回りが10月の約4.1%から大きく低下し、11月は約3.7%で終えた。また、為替市場は、FRBの利上げスピード鈍化期待などから、これまでの円安傾向から一転して円高傾向となり、11月は前月末の水準から9円ほど円高の1ドル139円台で終えた。

このような中、当月のファンド動向は、純資産総額が前月から7,197億円減少したものの、86兆1,764億円で前月との比較では小幅な減少にとどまった(図表7)。純流出入額では「国内株式」、「国内債券」以外で流入し、5,548億円の純流入となった。分類別の騰落率は、まちまちな展開となった。資金流入額上位の個別のファンドでは、当月設定された「ティー・ロウ・プライス 米国オールキャップ株式ファンド」に407億円流入した(図表8)。騰落率上位の個別ファンドでは、中国関連銘柄が多く挙がっており、特に「UBS中国新時代株式ファンド(年1回決算型)」(+19.2%)が好調であった。

図表7 2022年11月のデータ(億円)

	純資産総額	前月からの増減	純流出入額	1ヵ月の騰落率
国内株式	98,337	2,060	-427	2.49%
グローバル株式(ヘッジなし)	350,616	-8,156	3,508	-0.96%
グローバル株式(フルヘッジ)	28,825	466	112	2.88%
国内債券	38,775	-247	-16	-0.49%
グローバル債券(ヘッジなし)	72,861	-1,853	307	-1.64%
グローバル債券(フルヘッジ)	37,444	863	395	2.07%
複合	136,863	222	688	0.20%
不動産	71,126	-757	700	-0.29%
コモディティ	4,808	100	126	-0.26%
オルタナ投資	21,016	73	134	0.20%
その他	1,093	31	20	0.45%
合計	861,764	-7,197	5,548	-

(出所) 投資信託協会より日興リサーチセンター作成

図表8 2022年11月における資金流入額と騰落率の上位ファンド

No.	ファンド名称	1ヵ月流入額(億円)	No.	ファンド名称	1ヵ月騰落率
1	eMAXIS Slim 米国株式(S&P500)	661	1	UBS中国新時代株式ファンド(年1回決算型)	19.2%
2	ティー・ロウ・プライス 米国オールキャップ株式ファンド	407	2	UBS中国新時代株式ファンド(年2回決算型)	19.1%
3	eMAXIS Slim 全世界株式(オール・カントリー)	379	3	三菱UFJ チャイナオープン	15.5%
4	楽天・全米株式インデックス・ファンド	256	4	UBS中国株式ファンド	14.5%
5	SBI・V・S&P500インデックス・ファンド	252	5	JPMアジア株・アクティブ・オープン	13.3%

(出所) 投資信託協会より日興リサーチセンター作成

4. 12月

12月 は中旬に発表された米国 CPI の上昇率の低下傾向が続いていることを確認したものの、FOMC で 0.5%の利上げが行われたことなどを契機に、これまで大きく回復してきた株式市場は一転して軟調となった。12月の株式市場をみると、米国では NY ダウが前月から約 4%下落した。このほか、日本は日経平均が約 7%の下落、ドイツは DAX が約 3%の下落となった。また、グローバルリート市場もこれまでの上昇傾向から下落に転じた。一方、債券市場は米国の 10 年国債利回りが上昇し、12月 は約 3.9%で終えた。なお、為替市場は、世界的な景気後退リスクの懸念が取り上げられたことから、質への逃避が意識され、前月に続く円高傾向となり、12月 は前月末の水準から 8 円ほど円高の 1 ドル 131 円台で終えた。

このような中、当月のファンド動向は、純資産総額が前月比で 3 兆 1,948 億円減少し、82 兆 9,816 億円となった (図表 9)。一方、純流出入額は、「グローバル株式 (ヘッジなし)」、「国内株式」が牽引し、1 年ぶりに 1 兆円を超える純流入となった。分類別の騰落率は、FOMC で金融引き締め長期化や、景気後退による業績悪化懸念が強まり、全ての分類で下落した。資金流入額上位の個別ファンドでは、昨年から設定本数が増えてきている、持ち切り運用型の「GS グローバル社債ターゲット 2022-12 (限定追加型)」が 716 億円の流入であった (図表 10)。騰落率上位の個別ファンドは、金融関連ファンドやリスク回避としてゴールド関連のファンドが好調であった。

図表 9 2022 年 12 月のデータ (億円)

	純資産総額	前月からの増減	純流出入額	1ヵ月の騰落率
国内株式	94,964	-3,373	2,245	-5.40%
グローバル株式 (ヘッジなし)	333,177	-17,438	4,453	-5.18%
グローバル株式 (フルヘッジ)	27,944	-881	-58	-2.37%
国内債券	38,140	-635	-80	-1.27%
グローバル債券 (ヘッジなし)	70,108	-2,753	352	-3.47%
グローバル債券 (フルヘッジ)	38,387	944	1,260	-0.55%
複合	133,018	-3,845	958	-3.39%
不動産	67,556	-3,570	575	-4.29%
コモディティ	4,824	16	52	-1.04%
オルタナ投資	20,722	-294	612	-2.03%
その他	974	-119	-82	-1.42%
合計	829,816	-31,948	10,287	-

(出所) 投資信託協会より日興リサーチセンター作成

図表 10 2022 年 12 月における資金流入額と騰落率の上位ファンド

No.	ファンド名称	1ヵ月流入額 (億円)	No.	ファンド名称	1ヵ月騰落率
1	eMAXIS Slim 米国株式 (S&P500)	849	1	トルコ株式オープン	8.0%
2	GS グローバル社債ターゲット2022-12 (限定追加型)	716	2	ダイワ金融新時代ファンド	6.0%
3	eMAXIS Slim 全世界株式 (オール・カントリー)	593	3	三菱UFJ チャイナオープン	4.6%
4	日経225ノーロードオープン	448	4	ブラックロック・ゴールド・メタル・オープン A コース (為替ヘッジ付)	3.4%
5	SBI・V・S&P500インデックス・ファンド	355	5	UBS 中国新時代株式ファンド (年1回決算型)	2.7%

(出所) 投資信託協会より日興リサーチセンター作成



5. 1月

1月は中旬に発表された米国CPIが6%台になるなどさらに上昇率が低下してきたことから、月末に予定されている次回FOMCで利上げスピードのさらなる調整に期待が集まり、株式市場は前月の下落から上昇に転じた。1月の各国の株式市場をみると、米国ではNYダウが前月から約3%上昇した。このほか、日本は日経平均が約5%の上昇、ドイツはDAXが約9%の上昇となった。また、グローバルリート市場も前月の下落から一転して大幅な上昇で推移した。さらに、債券市場は米国の10年国債利回りが低下し、1月は約3.5%で終わった。なお、為替市場は、世界的な景気後退リスクの懸念が依然としてくすぶっていることから、質への逃避による円高傾向が続き、1月は前月末の水準から2円ほど円高の1ドル130円台で終わった。

このような中、当月のファンド動向は、純資産総額は前月比で3兆2,494億円増加し、86兆2,309億円となった(図表11)。分類別の騰落率は、「国内債券」以外のすべてでプラスとなった。資金流入額上位の個別ファンドでは、独自のバリュー・アプローチによりグローバル比較で見た割安銘柄を厳選し投資する「インベスコ 世界厳選株式オープン<為替ヘッジなし>(毎月決算型)」がランクインした。騰落率上位の個別ファンドは、上位4位までを「グローバル・フィンテック株式ファンド」シリーズが独占し、すべて20%以上のプラスのリターンと好調であった(図表12)。

図表11 2023年1月のデータ(億円)

	純資産総額	前月からの増減	純流出入額	1ヵ月の騰落率
国内株式	99,407	4,443	251	4.29%
グローバル株式(ヘッジなし)	351,861	18,683	3,205	4.86%
グローバル株式(フルヘッジ)	29,470	1,526	3	5.20%
国内債券	38,010	-130	-45	-0.24%
グローバル債券(ヘッジなし)	71,556	1,448	377	2.11%
グローバル債券(フルヘッジ)	39,438	1,051	464	2.07%
複合	136,036	3,018	469	2.53%
不動産	69,038	1,482	429	3.68%
コモディティ	4,945	121	12	1.76%
オルタナ投資	21,505	783	-53	2.81%
その他	1,042	68	42	1.05%
合計	862,309	32,494	5,153	-

(出所) 投資信託協会より日興リサーチセンター作成

図表12 2023年1月における資金流入額と騰落率の上位ファンド

No.	ファンド名称	1ヵ月流入額(億円)	No.	ファンド名称	1ヵ月騰落率
1	eMAXIS Slim 米国株式(S&P500)	633	1	グローバル・フィンテック株式ファンド(為替ヘッジあり・年2回決算型)	21.8%
2	eMAXIS Slim 全世界株式(オール・カントリー)	427	2	グローバル・フィンテック株式ファンド(為替ヘッジあり)	21.7%
3	インベスコ 世界厳選株式オープン<為替ヘッジなし>(毎月決算型)	278	3	グローバル・フィンテック株式ファンド(年2回決算型)	20.9%
4	SBI・V・S&P500インデックス・ファンド	260	4	グローバル・フィンテック株式ファンド	20.9%
5	楽天・全米株式インデックス・ファンド	228	5	みらいコネクティブファンド	20.8%

(出所) 投資信託協会より日興リサーチセンター作成

## 6. 2月

1月末～2月初めにかけて行われたFOMCでは米国CPIの上昇率の低下傾向などを受けて利上げスピードを一段と落とし、0.25%の利上げとした。しかし、中旬に発表されたCPIは予想されたほど低下しなかったことからFRBの利上げ停止時期が遠のいたとの観測もあり、株式市場はまちまちな展開となった。2月の各国の株式市場をみると、米国ではNYダウが前月から約4%下落した。一方、日本は日経平均が前月とほぼ同水準、ドイツはDAXが約2%の上昇となった。また、債券市場は米国の10年国債利回りが大きく上昇し、2月は約3.9%で終わった。さらに、グローバルリート市場は米国などの金利上昇を受け、軟調な展開で推移した。なお、為替市場は、ここ数カ月続いていた円高傾向から円安へと転じ、2月は前月末の水準から6円ほど円安の1ドル136円台で終わった。

このような中、当月のファンド動向は、純資産総額が前月比で1兆5,245億円増加し、過去最高額の87兆7,554億円となった(図表13)。分類別の純流入額をみると、「グローバル株式(フルヘッジ)」、「国内債券」以外で流入し、全体で4,078億円の純流入であった。分類別の騰落率は、各主要国中央銀行の金融政策の転換点待ちで、まちまちな値動きとなった。資金流入額上位の個別ファンドは、特に顔ぶれは変わらなかった(図表14)。騰落率上位の個別ファンドは、「野村日本企業価値向上オープン(米ドル投資型)」(+8.6%)や「新世代成長株ファンド」(+8.1%)が好調であった。

図表13 2023年2月のデータ(億円)

	純資産総額	前月からの増減	純流出入額	1ヵ月の騰落率
国内株式	100,093	686	101	0.95%
グローバル株式(ヘッジなし)	363,734	11,874	2,140	1.54%
グローバル株式(フルヘッジ)	28,958	-512	-210	-1.30%
国内債券	37,849	-161	-439	0.89%
グローバル債券(ヘッジなし)	72,863	1,307	571	1.27%
グローバル債券(フルヘッジ)	39,588	150	767	-1.78%
複合	137,293	1,257	491	0.39%
不動産	69,633	595	327	0.12%
コモディティ	4,908	-37	84	-2.23%
オルタナ投資	21,576	71	233	-0.42%
その他	1,058	16	15	0.11%
合計	877,554	15,245	4,078	-

(出所) 投資信託協会より日興リサーチセンター作成

図表14 2023年2月における資金流入額と騰落率の上位ファンド

No.	ファンド名称	1ヵ月流入額(億円)	No.	ファンド名称	1ヵ月騰落率
1	eMAXIS Slim 米国株式(S&P500)	465	1	米国インフラ・ビルダー株式ファンド(為替ヘッジなし)	8.8%
2	インベスコ 世界厳選株式オープン<為替ヘッジなし>(毎月決算型)	384	2	野村日本企業価値向上オープン(米ドル投資型)	8.6%
3	eMAXIS Slim 全世界株式(オール・カンントリー)	364	3	次世代モビリティオープン(為替ヘッジなし)	8.1%
4	MHAM外国債券インデックスファンド<為替ヘッジあり>(ファンドラップ)	256	4	新世代成長株ファンド	8.1%
5	債券パワード・インカムファンド(資産成長型)	197	5	脱炭素関連 世界株式戦略ファンド(資産成長型)	8.1%

(出所) 投資信託協会より日興リサーチセンター作成



7. 3月

3月は中旬に発表される米国CPIや下旬に行われる次回FOMCの動向に注目が集まる中、テック企業への融資を得意とするシリコンバレーバンク（以下、SVB）破綻のニュースを受け、株式市場は米国を中心に一時急落した。しかし、預金者保護などの米国財務省の声明を受け、その後は値を戻す展開となった。3月の各国の株式市場をみると、米国ではNYダウが前月から約2%上昇、日本も日経平均が約2%の上昇となった。また、欧州ではクレディスイスの経営破綻を回避するためUBSが買収に合意したもののAT1債の無価値化などから金融不安が完全には払しょくされていない中、ドイツはDAXが約2%の上昇となった。なお、グローバルリート市場は軟調な展開で推移した。一方、債券市場は金融不安などを背景に一般的に金利の低下がみられ、米国の10年国債も利回りが大きく低下し、3月は約3.5%で終えた。また、為替市場は再び質への逃避が意識され、3月は前月末の水準から3円ほど円高の1ドル133円台で終えた。

このような中、当月のファンド動向は、純資産総額が前月に引き続き過去最高額となり、4,673億円増の88兆2,227億円となった（図表15）。分類別の騰落率は、欧米の金融システム不安から「不動産」（-5.03%）が大幅に下落した。資金流入額上位の個別ファンドは、当月設定開始となった「先進国好利回りCBファンド2023-03（為替ヘッジあり）（限定追加型）」が4位にランクインした（図表16）。騰落率上位の個別ファンドは、金鉱株ファンドが上位に挙がる一方で、ハイテク関連ファンドも上位に挙がった。

図表15 2023年3月のデータ（億円）

	純資産総額	前月からの増減	純流出入額	1ヶ月の騰落率
国内株式	102,163	2,070	301	1.48%
グローバル株式（ヘッジなし）	367,183	3,449	4,295	-1.16%
グローバル株式（フルヘッジ）	29,388	431	-51	0.34%
国内債券	37,759	-91	-579	1.17%
グローバル債券（ヘッジなし）	72,939	76	478	-0.52%
グローバル債券（フルヘッジ）	39,542	-46	-143	0.17%
複合	138,961	1,668	1,518	0.16%
不動産	66,263	-3,371	639	-5.03%
コモディティ	5,170	263	78	3.09%
オルタナ投資	21,778	202	-12	-0.67%
その他	1,081	23	10	0.58%
合計	882,227	4,673	6,535	-

（出所）投資信託協会より日興リサーチセンター作成

図表16 2023年3月における資金流入額と騰落率の上位ファンド

No.	ファンド名称	1ヶ月流入額 (億円)	No.	ファンド名称	1ヶ月騰落率
1	eMAXIS Slim 米国株式（S&P500）	628	1	ブラックロック・ゴールド・メタル・オープン Aコース (為替ヘッジ付)	15.7%
2	インベスコ 世界厳選株式オープン <為替ヘッジなし>（毎月決算型）	572	2	ブラックロック・ゴールド・ファンド	14.6%
3	eMAXIS Slim 全世界株式（オール・カントリー）	506	3	米国分散投資戦略ファンド（5倍コース）	10.0%
4	先進国好利回りCBファンド2023-03 (為替ヘッジあり)（限定追加型）	291	4	グローバル5.5倍バランスファンド（1年決算型）	9.9%
5	SBI・V・S&P500インデックス・ファンド	246	5	野村世界業種別投資シリーズ（世界半導体株投資）	7.0%

（出所）投資信託協会より日興リサーチセンター作成

## 8. おわりに

2022年度下期（10月～3月）の株式市場は、ロシアによるウクライナ侵攻の地政学リスク、コロナショック後の本格的な経済正常化過程におけるインフレ率上昇を受けた米欧を中心とした急激な金融引き締めや、欧米の金融システム不安などにより値動きの大きな展開となった。上期は急激なインフレに悩まされていたが、例えば米国のCPIの前年同月比は2022年6月（9.1%）をピークに、2023年3月（5.0%）まで9カ月連続で鈍化している。そのため、急激な金融引き締めは2023年度に入り徐々にペースダウンする見通しである。FRBは2023年5月2-3日に開かれたFOMCにて、年内に利上げの停止を示唆するような発表もしている。また、コロナの収束からの経済再開が世界的に解禁され、中国ではゼロコロナ政策の終了、国内ではゴールデンウィーク後の2023年5月8日からコロナの感染法上の位置付けがインフルエンザと同じ第5類に分類されるといった、本格的な経済再開は始まったばかりである。金融政策面では、「貯蓄から投資」のシフトが求められている世の中で、「新しい資本主義」の柱であるNISA制度の拡充が2024年に控え、一般NISAやつみたてNISAの新規口座開設やより一層の活用が期待されている。

上記から、株式市場の転換点は既に到来しており、今後、より一層マーケットの動きとファンド動向に注視すべき局面だと考える。

### 【参考文献】

【Short Review】2022年度上期のファンド動向

<https://www.nikko-research.co.jp/library/11998/>

(END)